

行政・学校・福祉専門職のみなさんにこそ読んでほしい!

ある日の こども食堂

こども食堂エピソードブック2



編集・発行



NPO法人 全国こども食堂支援センター

むすびえ

刊行にあたって

こども食堂は、「子どもの貧困対策」と「地域の交流拠点」という二つの性格を併せ持つ、民間発の自主的・自発的な取組みです。2021年時点で、日本全国に6,014箇所のこども食堂があることが分かっています（2021年12月むすびえ調べ）。私たちがむすびえで活動する中で、こども食堂運営者の方々から、こども食堂での出来事をお聞きする機会が多くあります。その全てが子どもたちや家族に寄り添ったあたたかみにあふれたものだと感じました。そんなこども食堂のあたたかみをお伝えし、こども食堂の運営者同士で改めて分かち合えるきっかけになればと思い、2021年3月に「こども食堂エピソードブック ～ある日のこども食堂～ “ちょっと気になる子”との関わり」を作成しました。この冊子はこども食堂のありのままの物語を多くの方にお届けしてきました。

こども食堂で生み出されている物語そのものをもっと多くの方に伝えたい、より多くの方がこども食堂に関わるきっかけを作りたいと思い、次に作成したのが本冊子です。特に、普段から子どもたちを支えている行政・学校・福祉専門職の方々にお届けしたいと願って作成しました。

本冊子を読んでいただくにあたっては、まず「冊子に込めた私たちの願い」と「冊子の使い方」をご一読いただければと思います。その後には、9つのエピソードを収録していますので、最初から全て読んでいただいてもいいですし、ご自身と関連のありそうなエピソードや、気になったエピソードから読んでいただいても構いません。

この冊子をきっかけに、少しでもこども食堂を身近に感じていただけたら幸いです。

最後になりましたが、この冊子の作成にあたってご協力をいただいたこども食堂の皆さま、関係者の皆さま、そしてこの冊子を手にとってくださった全ての方々に感謝を申し上げます。

認定 NPO 法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ
プロジェクトリーダー **山角 直史**

2022年4月

目次

INDEX

- 2 刊行にあたって
- 3 目次
- 4 冊子に込めた私たちの願い
- 9 冊子の使い方
- 10 本誌作成スタッフメッセージ

こども食堂と“気になる子”の9つのエピソード

- 12 **事例 01** こども食堂が地域の中心に
- 16 **事例 02** ありのままの自分でいられる居場所
- 20 **事例 03** “アンテナ”としてのこども食堂
- 24 **事例 04** こどもの居場所・地域の駆け込み寺
- 28 **事例 05** 気付きの起点となる場所
- 32 **事例 06** つながる・寄り添う・見守る
- 36 **事例 07** 「わたしが倒れたら、この子見てくれる？」
- 40 **事例 08** 多世代の人々が交差する場
- 44 **事例 09** ママ友として関係を築く

- 48 こども食堂とつながった専門職の声
- 49 ネクスト・アクション ～何かしたい！と思ってくれた方へ～
- 50 おわりに
- 51 クレジット

ある日
こども食堂

冊子に込めた私たちの願い

専門職の方たちへ

●この冊子は、「こども食堂に関心はあるけれど、よくは知らない」という専門職(この冊子では、行政・学校・福祉専門職を指します)の方たちに読んで欲しくて作りました。

●こども食堂は、しばしば「食べられない子が行くところ」と言われています。しかし開催は月1回のところが多いです。「それでは食の貧困を解決できないだろう」と思ったことはありませんか？いろいろな人が来ていて、特段困っている子が来ているようには見えないという話を聞いたことはないでしょうか？こども食堂は、いったい誰のために何をやっているのかよくわからない、という疑問を感じたことはありませんか？

●私たちは、こども食堂では、専門職の方たちに参考となる活動が行われている、と考えています。そして、こども食堂と何らかの形で連携することは、専門職の方たちにメリットのあることだ、と考えています。本当にそうなのか、この冊子を読んで考えていただければ幸いです。

こども食堂とは

●「こども食堂とは、こども食堂・地域食堂・みんな食堂等の名称にかかわらず、子どもが一人でも安心して行ける無料または低額の食堂」というのが、私たちの考えるこども食堂の定義です。子どもが一人でも安心して行ける場所であれば、子ども1名に高齢者99名でも(名乗りたければ)こども食堂と名乗っていただいて結構です。つまり「子ども専用食堂」ではありません。また「食堂」は「食べるという行為をする場所」

といった程度の意味で、公園で食べるこども食堂も「あり」です。飲食店のような店舗を想定しているわけではないし、食事の内容も問いません。おやつだけでも(名乗りたければ)こども食堂です。

●こども食堂のほとんどは、参加に条件をつけていません。つまり「どなたでもどうぞ」で運営されています。実際に大人も参加するこども食堂が7割です。所得制限もありませんから、ほとんどのこども食堂には所得が高い人も低い人も来ています。と言うか、「問わない」ので、来ているのがどんな子どもや大人なのか知りません。

●この「問わない」という姿勢は、こども食堂を理解していただく上で重要なポイントだろう、と私たちは考えています。「問わない」のは「丸ごと受け入れよう」とする積極的な態度から来ています。赤ちゃんでもお年寄りでも、独り身でも家族でも、所得が高い人でも低い人でも、健常者でも障がい者でも、日本国籍でも外国籍でも、「いいよ、いいよ、一緒に食べよう。一緒に食べたらいいよね」と引き受ける姿勢です。なぜか。地域にはあらゆる人が暮らしているからです。高齢者と障がい者が同居していて、日本人の隣に外国籍の方が暮らしているのが地域です。地域にもともと線はない。だから、線のない地域に線引きすることなく、地域の縮図のような場所になればいい、と思っている運営者の方が多いです。入口で誰何しない、問わない、という点では、公園のような場所とも言えるかもしれません。公園も、年齢・属性・所得にかかわらず利用できる場所です。グループで遊んでもいいし、一人で日向ぼっこしていてもいい、と自由な振る舞いが許されている点でも、こども食堂と公園は似ています。

●そのため、多くのこども食堂は「何らかの課題を抱える人同士」が集まる福祉的な居場所、支援を目的とする居場所とは異なります。世の中には、不登校やひきこもり、就労困難者や障がい者、認知症の当事者やその家族など、同じ課題を抱える人たちが集まる居場所があり、それはとても重要な役割を果たしていますが、多くのこども食堂はそれらとは違います。福祉的な居場所、支援目的の居場所が、同じ立場、同じ境遇、同じ課題というように「同じ」を鍵概念として開催され、それゆえに価値を持っているのに対して、こども食堂のような交流を目的とする地域の居場所は、違う(多様な)年齢、違う家庭環境、違う境遇というように「違い」を鍵概念として開催され、

それゆえに価値を持っています。こども食堂に来る方たちが語る参加の理由で多いのは「ここでは、いろんな人と知り合える」です。相談支援につながった人が併設された居場所にも来るようになるといった成り立ちの支援目的の居場所とは大きく異なります。

ちょっと気になる…

●誰が来てもいい、誰なのかを問わない、そして実際に雑多人たちが参加しているのがこども食堂の「ふつう」ですが、そうであるがゆえに、こども食堂には、自らは決して相談機関に訪れることがないような、しかし何らかの課題を抱えている人が来ることがあります。課題を抱えている自覚がなくても、相談するつもりがなくても、行ける場所だからです。また、そこに行ったからと言って、「何か困っているんだね」と誰かから（自分自身も含めて）ラベリングされることがないので、スティグマもつかないためです。私たちはそれを「青信号の顔をして行ける場所」と呼んでいます。青信号の顔をして行ける場所には、自らは相談機関に訪れることのない黄信号の人も訪れることができます。ここで言う「黄信号の人」とは、たとえば行政が支援対象者として把握していない人たち、課題を抱えているという自覚がない人たち、傍から見てわかるほどには課題が顕在化していない人たち、という程度のゆるやかなイメージで捉えていただければ結構です。こども食堂には黄信号の人たちも来ています。そこが相談機関と異なる点です。

●しかし、決して誤解しないでいただきたいのですが、こども食堂は「住民の中から黄信号の人たちを発見するための場所」ではありません。そうラベリングされた途端に、その場所にはスティグマが付着し、住民の方たちが寄って来なくなります。「課題のある人が行くところ、課題のある人を見つけるところ」となった途端に、地域の人々は「自分は、あそこに行っている人たちとは違う」と、自分を差別化しようとし（地域の高齢者の方が、介護予防の居場所に対して「おれは、あんなところに行くほど弱っちゃいない」と啖呵を切るのを聞いたことがあります）。こども食堂は、病気の人を見つけるためにみんなを集めるような集団検診の場ではありません。

●それでも、「黄信号の人」がその場にいるかぎり、何かの拍子にそのことに気付くことがあります。「気付いてしまう」と言ってもいいかもしれません。それが、私たちが「ちょっと気になる」と呼ぶ現象です。さすがにちょっとどうかと思うくらいの量を食べる、他の子たちとまったく変わらない様子で遊んでいたが、いざ帰るとなったら急に落ち着きがなくなる、子どもが親の顔色を異常に窺う、などです。「ん？」「あ！」「え！？」という現象に、こども食堂の人たちは出会ってしまうことがあります。

●そんなとき、こども食堂のみなさんはどうされているのでしょうか？ それ、この冊子で紹介していることです。こども食堂のみなさんは、家族構成を聞き取り、アセスメントし、自立支援計画を作り…といったことはしていません。しかし、詳しいことはよくわからない、生育歴も家族関係もよくわからないという中で、見守り、気遣い、関わり続けながら、本人とその周囲に働きかけ、時間をかけて、変化を待ち、変化を生み出しています。それは「見守る」「寄り添う」「伴走する」ということの原点を、私たちに思い出させてくれます。

●そのことは、専門職のみなさんの相談者との出会い方、関わり方と多くの点で異なっているだろうと思います。その違いから学びあえる、そんな関係が生まれることを、私たちは願っています。

●こども食堂は多様です。これまで「多くの」「ほとんどの」こども食堂は、と書いてきましたが、こども食堂の中には、専門職の方が専門性をフルに発揮してケースワークを実践されているこども食堂もあります。そうしたこども食堂では、専門職のみなさんにとって馴染みのある風景が見られ、馴染みのある用語が飛び交っているでしょう。しかし、そのような福祉っぽくないこども食堂が持つ福祉的価値についても、専門職のみなさんの理解と共感が広がることを、私たちは願っています。

この冊子を読み終えたら

●私たちは、この冊子を読んでもらった専門職のみなさんに、「黄信号の人の対応に力を貸してあげよう」と思ってもらいたいわけではありません。そうではなく、「自分も

その場にいたい、行きたい」と思ってもらえたらうれしいです。私たちは、こども食堂が「地域住民の手による相談所」になることを望んでいません。相談職のネームプレートを掲げた人がいると、そういう場だと思われてしまうようになるので、それは止めていただきたいです。

●たとえば、こども食堂の参加者に植木屋さんがいるとします。その人は「おれは植木屋だ」と触れ回ったりしないでしょう。でもみんなで楽しく食べ、過ごしている中で、来ているおばあさんが庭木のちょっとした手入れで困っていることに気付いたら、「それくらいなら、おれがやってやろうか」と申し出ることがあるでしょう。「あら、いいの？悪いわね」となり、家に来て初めてその人が植木屋さんだったことを知る、そんなことが起こります。その植木屋さんのように、それぞれの人が自分のできることをさりげなく持ち寄っている中に、専門職の方の専門性もある——そんな状態を作っていたければと願います。そうであれば、誰もその場を「相談事のある人が行くところ」とは言わないでしょう。植木屋さんが一度おばあちゃんのお手伝いをしてあげたからといって、誰もそのこども食堂を「庭木の手入れをしてほしい人が行くところ」と言わないように。

●専門職の知見やノウハウは、貴重で重要なものです。こども食堂を運営するみなさんの知見やノウハウにも、貴重で重要なものがあります。お互いがそれぞれの持ち味を発揮することで、みなさんの暮らす地域が、誰もとりこぼさない、みんながゴキゲンに暮らせる (Well-being) 地域となることを願っています。

認定 NPO 法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ

理事長 湯浅 誠

2022年4月



冊子の使い方

こども食堂にはたくさんの人、子どもたちが集まります。そんな中には、はっきりとはわからないけれど、こども食堂での“食べる”を通じた交流や信頼関係の中でしか見せないほんの小さなSOSが、ポロリとこぼれ出る瞬間があります。それは本人が無意識である場合もあります。

こども食堂は、その小さなSOSをキャッチし、子どもや家庭の抱える課題に気づき、寄り添うことが出来る場所です。そんな瞬間を全国のこども食堂からヒアリングしエピソードとして記録したのがこの冊子です。専門的な知識や、権限が無いからこそ、あたたかい“おせっかい”だからこそ出来ること、得意なことがあります。一方で、こども食堂だけでは抱えきれないこと、出来ないこともあります。

ぜひ、こども食堂という場でおきる出来事をながめながら、専門職の場にも通ずる“なにか”を感じていただけたらうれしいです。

活用場面

- ・こども食堂を知るきっかけに
- ・専門職とこども食堂のつながりの事例の参考に
- ・専門職とこども食堂のよりよい連携・協力体制の参考に

ネクストアクション
(P49)も
ご覧ください!

「よりよいポイント」と「タグ」

各エピソードの中で、こども食堂があたたかく子どもや家族に寄り添っているなあと本誌作成スタッフが感じたポイントを、「よりよいポイント」として各ページのカラーでハイライトしています。

また、各エピソードに登場する主な登場人物の「タグ」を各ページの右側に付けています。ご自身や関係する機関のエピソードを優先して見ていただいても構いません。

「MEMO」と「このエピソードを読んで」

各エピソードには、ご自身も専門職としての実践経験があり、むすびえでも活動している大学教員の野田博也さん・岩垣穂大さんの、エピソードを読んだの気づき・感想を添えています。

おまわり

この冊子は、6000箇所以上あるこども食堂（むすびえ2021年12月調べ）の中から9つのエピソードを紹介したもので、「こども食堂はこうあるべき」との考えを示したものではありません。こども食堂はその多様性こそ価値があると私たちは考えます。

また、むすびえはこども食堂を“代表”する存在ではありません。こども食堂のあたたかい“おせっかい”の無限の可能性を信じ、応援したいと考えているにすぎません。この冊子で、こども食堂が秘める“可能性”を少しでも伝えられたらうれしいです。

そして、この冊子は専門職のみなさんに「こうあるべきだ」ということを示すものでもありません。9つのエピソードに触れる中で、ご自身の地域・活動に照らしてこども食堂のリアリティを感じていただくきっかけとなれば幸いです。

本誌作成スタッフメッセージ

山角 直史 (プロジェクトリーダー)

こども食堂の魅力を伝えるために作った「ある日のこども食堂」から1年。より多くの人に「こども食堂って素敵!」と感じてほしいと、この冊子に想いを込めました。ぜひ、こども食堂のあたたかさを感じてください。

六鹿 篤美 (プロジェクトサブリーダー)

こども食堂って何?多様な在り方にこそ価値のあるこども食堂。そこで起きるエピソードのひとつひとつが”こども食堂”なのだと思います。地域のこども食堂にも想いを馳せながら、お読みいただくと嬉しいです。

松原 祥 (プロジェクトメンバー)

たった9つのエピソードではありますが、全国の地域で同じような働きかけが起こっているのではないかと考えます。本冊子が、誰も取りこぼさない社会をつくることの一助となることを願っています。

山縣 郁子 (プロジェクトメンバー)

こども食堂を支える連携づくりにお役立ていただければ幸いです。

大内 悠太郎 (プロジェクトメンバー)

こども食堂の可能性を多くの人へ届けたい、そう願っています。

渋谷 雅人 (プロジェクトアドバイザー)

こども食堂のエピソードはいつも心に響きます。

本誌作成アドバイザー略歴・メッセージ

野田 博也

愛知県立大学教育福祉学部教員で、社会保障・社会福祉政策を専門に研究。社会福祉士・精神保健福祉士。これまで、地元のこども食堂や中間支援ネットワークの運営、むすびえでの調査研究事業に参加。

「今回のエピソードを拝見しながら、人と人とのつながりを厚くするこども食堂の場づくりを、専門機関もいっしょに育てていく姿勢に感銘を受けました。」

岩垣 穂大

元所沢市社協職員で、現在金城学院大学人間科学部コミュニティ福祉学科で社会福祉士の養成に携わる。社協の職員時代には、コミュニティソーシャルワーカーや地域包括支援センターの社会福祉士として様々なまちづくりの活動に関与。

「インタビューを通して、こども食堂は地域に住む誰もが食を通してつながれる空間であることを改めて感じました。ボランティアとして参加するスタッフも仲間ができたり、生きがいを見つけたり、どんどん元気になれるところがこども食堂の最大の魅力だと思っています。」

こども食堂と“気になる子”の 9つのエピソード

こども食堂を開いている中で、様々なきっかけで
“ちょっと気になる子”と出会ったお話の中から、
特に印象的なお話をまとめました。

こども食堂が地域の中心に

CASE 01

ハナコさんは自身の自宅を拠点に、小学校の近くでこども食堂を運営しています。こども食堂の開設時から小学校との関係があったため、小学校内でチラシを配布してもらうこともありました。そのおかげでPTA内でもハナコさんの食堂のことが認知されており、PTAの役員の方が地域の「ちょっと気になる子」をこども食堂に連れてくることなどがあります。

今回は、PTA 役員のアヤカさんと、アヤカさんの紹介でハナコさんのこども食堂にやって来たゆいちゃんについて、ハナコさんから話を聞きました。

登場人物

- ・ハナコさん(運営者)
- ・アヤカさん(PTA 役員)
- ・ゆいちゃん(小学4年生)
- ・ゆいちゃんのお母さん

● ハナコさんとゆいちゃん

ハナコさんは、以前から学校やPTAともつながりがあったため、子どもを紹介されることがありました。そういった経緯からハナコさんのこども食堂に通うようになった子の中に、ゆいちゃんという小学生の女の子がいました。PTA 役員や学校の先生はゆいちゃんの生活を以前から心配していたようで、ハナコさんのこども食堂に参加し始める前から、PTA 役員であるアヤカさんがゆいちゃんに個人的に物品の支援などを行っていました。



MEMO

この人なら頼っても大丈夫って、専門機関の立場からでも思える人って、本当に貴重ですね。

● みんなでゆいちゃんを見守る

ハナコさんがアヤカさんから聞いた話によると、ゆいちゃんはお母さんとお兄さんとの3人暮らしで、お母さんが子どもたちの世話を十分にできていない様子であることがわかりました。またお兄さんが働いて家計を支えてはいたものの、ゆいちゃん一家は厳しい生活を強いられていたようです。

PTA や学校の先生みんながゆいちゃんのことを気にかけていた中で、ゆいちゃんがこども食堂に参加することになったため、ゆいちゃんが不自由なくこども食堂に通えるように地域の多くの人々が見守っていました。例えば、ハナコさんやアヤカさん、ゆいちゃんと顔見知りの民生委員など様々な人をメンバーにした、メッセージアプリのグループを作成していました。そこでは、ゆいちゃんに参加可能な日程などが情報交換されていました。また、ゆいちゃんができる限り参加できるように、他の子との不公平感が出ないように注意しながら、日程を変更したり開催日を増やしたりしていたようです。このように、**ゆいちゃんがあたたかく迎え入れられ安心して過ごせるように、スタッフや地域の人々みんなで協力していました。**

● 人見知りだったゆいちゃんが、こども食堂をお手伝いするまで

こども食堂に通い始めた頃のゆいちゃんは非常におとなしい印象で、帰るまでずっとアヤカさんと一緒にいました。しかし、参加を重ねるにつれてゆいちゃんも徐々に打ち解けていったようで、自分より年下の子の面倒を見るような様子も見られました。またその頃には、アヤカさん以外の大人の参加者やスタッフとも、気兼ねなく話すようになっていたそうです。

そしてゆいちゃんの参加回数が10回を超える頃には、こども食堂の受付をやったり、どんどん自分から手伝いをするようになっていました。

MEMO

専門機関だと、やらなければならないことがある程度決まっているがゆえに、もっと子どもに合わせてゆっくり接したいと思っても、できないこともありますよね。

こども食堂が地域の中心に

CASE 01

● お母さんともつながる

ゆいちゃんがこども食堂に通うようになってからは、アヤカさんとゆいちゃんのお母さんの関係も、以前と比べて良好になっていったそうです。ただ、上手く支援につながらないこともありました。例えば、ハナコさんとアヤカさんが知り合いの市役所職員と連携して、ゆいちゃんのお母さんに生活保護の受給に関して提案をしたことがありました。しかしゆいちゃんのお母さんの「生活保護は受けたくない」という意思が尊重されたため、その時は生活保護による支援は行わないこととなったそうです。

コロナ禍の影響でハナコさんは活動の形態を会食からフードパントリーへと移していましたが、その時変わらずゆいちゃんはハナコさんのもとを訪れ、パントリーで食材を受け取っていました。そしてある時、「こども食堂が始まったらまた来てね」と書いた手紙をみんなに渡す食材に入れておいたところ、ゆいちゃんのお母さんからお礼のメッセージが届いたそうです。ハナコさんはそれまではアヤカさんを介してゆいちゃんのお母さんと関わっていましたが、お母さんから改めて直接感謝や信頼の気持ちを伝えられたことで、強く感激したそうです。

MEMO /

ゆいちゃんのお母さんが地域のみなさんとつながり、孤立無援じゃないんだなと感じて、ゆいちゃんのお母さんの支えになっていると感じました。

● 「こども食堂をやってくれて、ありがとう。」

ハナコさんが近隣の小学校と良好な関係を築けたのは、小学校の先生の理解によるところもあったそうです。ハナコさんが、こども食堂を新たに始めるにあたり小学校に挨拶に行った際には、教頭先生が直接出迎えてくれました。教頭先生は地域にこども食堂があったならと以前から思っていたようで、「こども食堂をやってくれて、ありがとうございます」とハナコさんに感謝を述べてくれ、チラシの配布なども積極的に協力してくれました。

● こども食堂が地域の中心に

ハナコさんは自身のこども食堂を含めて、複数の食堂の立ち上げに携わってきています。その経験から、立ち上げに先立って周辺地域の中心人物や、キーパーソンとなるような専門職を把握し、その人たちと知り合えるように事前に動くようにしているそうです。

ハナコさんの地域では、こども食堂を含めた地域のつながりができています。また、「気になる子と一緒にこども食堂に行ってみよう」という共通認識が、こども食堂の運営者や支援者の間で共有されているそうです。運営者だけでなく、学校の教職員、PTA、民生委員など様々な地域の担い手が、こども食堂を地域での出会いの場所として捉えているため、こども食堂が子どもたちを見守るネットワークの中核になっているとのことでした。



MEMO /

今回のエピソードでは、地域にこども食堂があることで、様々な人たちにつながりが広がっていることが分かりました。

このエピソードを読んで

by 野田

こども食堂だから信頼できる、というのではなく、これまで地域の仲間や学校の先生と良好な関係を築いていたハナコさんの活動だから信頼でき輪が広がった、という側面が大きいのと思いました。地域住民や学校の先生、専門機関が互いを知り理解を深めてきたからこそ、生まれたエピソードなんじゃないかな。

ありのままの自分でいられる居場所

CASE 02

ミユキさんが運営しているこども食堂の近くには、高校や大学・専門学校があります。ミユキさんが近隣の学校とつながりを持っていることもあり、多くの学生がボランティアスタッフとしてこども食堂に参加しています。

今回は近くの高校に通いながら、スタッフとして参加しているあおいくんとさくらさんについて、お話を聞きました。

登場人物

- ・ミユキさん(運営者)
- ・あおいくん(高校1年生)
- ・さくらさん(高校1年生)

● あおいくんの第一印象

あおいくんがミユキさんのこども食堂を初めて訪れたのは、彼が高校1年生の時でした。かねてからミユキさんと知り合いだった高校の先生から、「夏休みに居場所がない学生たちにこども食堂でボランティアをさせてほしい」という願いがあり、その時に先生と一緒に来た学生の一人があおいくんでした。

初めてミユキさんに会った時のあおいくんは、髪の毛が赤色で、目つきも鋭く、不良のような印象だったそうです。ただ、あおいくんは子どもと接するのは好きだったみたいなので、ボランティアスタッフとして子どもと一緒に遊んでもらうことになりました。



MEMO /

髪の毛の色などの外見で判断せず、「誰でもおいで」の言葉掛けが、悩みを抱える子どもたちにはとても嬉しく感じられるのかなと思います。たくさんの価値観をお互いに認め合うことで参加者みんなが成長できる場が、こども食堂なのかなと感じます。

● あおいくんの変化と新たな目標

子どもたちから目立つ髪色について聞かれることもあったそうですが、あおいくんは上手に対応していました。子どもたちと楽しそうに遊ぶ様子を見て、ミユキさんは「おっ、すごいなあ」と思ったそうです。あおいくんに「子ども好きなの?」と聞くと、「嫌いじゃないっす」と照れながら答えました。

あおいくんの印象は、こども食堂でボランティアをするようになってから徐々に変わっていききました。目つきも段々と柔らかくなり、同世代のボランティアや学生の輪の中にも積極的に入っていくようになったそうです。

そして、高校3年生になった時には、「大学に進学したい。子どもが好きだから保育士になりたい!」という夢を持つようになりました。あおいくんの通う学校から大学進学を目指す学生はほとんどいないため、その目標をあおいくんの口から聞いたミユキさんもびっくりしたそうです。

● 大学受験とその後

ミユキさんをはじめとして、周囲の人たちの応援のもと、あおいくんは受験勉強を始めました。こども食堂近くの大学に進学するべく勉強に勤しむ一方で、ボランティアにも欠かさず行っており、夏休みにはほぼ毎日こども食堂に顔を出していました。

しかし、一年間努力を尽くしたあおいくんでしたが、残念ながら大学受験に合格することはできませんでした。高校を卒業した後あおいくんは就職しましたが、今でもミユキさんと連絡を取り合っているとのことでした。

MEMO /

大学合格を目指して一生懸命努力し、それを多くの人に支えてもらった経験はあおいくんの心の財産になっていると思います。このような体験ができるのは、やっぱりこども食堂ならではの経験ではないでしょうか。

ありのままの自分でいられる居場所

CASE 02

● 綺麗なピンク色の髪のさくらさん

さくらさんもあおいくんと同じ高校の生徒で、ファッション系のコースで服飾やネイルアートなどを学んでいます。ある時、この学校とミュキさんのこども食堂が協力して、子どもたちにネイルアートをするイベントを行うことになりました。その際の運営側の学生の一人がさくらさんでした。

ミュキさんがさくらさんと初めて会ったのは、そのイベントを企画する打ち合わせを行った時でした。さくらさんに対する最初の印象として、他に類を見ないようなピンク色の髪の毛がミュキさんの目に留まりました。一方で、周りとのコミュニケーションは少し苦手そうで、打ち合わせの最中も積極的に発言することはなかったそうです。

打ち合わせの後、ミュキさんはさくらさんに対して、「髪の毛綺麗だね。自分でやったの？いいね！」と思っていたことを率直に伝えました。するとさくらさんは、ミュキさんに褒められたことに一瞬きょんととして、「そんなこと大人に言われたの初めて！」と言いながら、段々と明るい顔になり、ミュキさんに心を開いてくれるようになったそうです。

MEMO /

さくらさんは、これまで「大人から褒められる」という経験が少なかったかもしれません。家庭でも学校でもない「こども食堂」という居場所で様々な大人と出会えたことが、さくらさんの成長のきっかけとなっているのは間違いなく感じました。

● 話しかけられることで成長したさくらさん

イベント当日、さくらさんは緊張した様子でしたが、子どもたちが「髪の毛きれい」「アニメみたいで素敵！」と気軽に話しかけてくれたおかげで、参加者とも上手にコミュニケーションをとりながらネイルアートをすることができたそうです。

● ありのままの自分でいられる居場所

さくらさんが自分の得意なことや好きなことで、人に喜んでてもらえたり褒められた経験により、出会った当初から変化したと、ミュキさんは実感しています。

ミュキさんは、自身のこども食堂に来た人は、その人のそのままの姿を受け止めるように意識しています。校則や世間体といった価値観で子どもたちを縛り付けるのではなく、そのまんまの個人をまずは受け入れる。それはこども食堂の場だからこそできることであり、子どもたちの本当の声を拾うためには、何よりも大切なことだと考えているそうです。



MEMO /

ミュキさんの「その人のそのままを受け止める」姿勢がとても素敵ですね！まずは信頼関係をつくり、こども食堂が「自分の居場所」であることを分かってもらうことをとても大切にされている人ですね。

by 岩垣

このエピソードを読んで

高校生への支援については、小学生や中学生に比べてまだまだ行き届いていないのではないかと感じています。今回の事例を通して、大人でもない子どもでもない不安な時期にこども食堂と出会い「ありのままの自分」を認めてもらえる経験は、間違いなく将来に良い影響を与えると感じました。また、高校生には大人に近いスタッフとして主体的に活躍してもらうことも、とてもよい関わり方だと思いました。

“アンテナ”としてのこども食堂

CASE 03

カズヒロさんは公共施設を借りてこども食堂と学習支援活動の運営を行っています。コロナ禍においては、休校によって給食がなくなってしまった小学生のために、近所のこども食堂・小学校と協力してお弁当を配布するなど、精力的に活動してきました。

今回は、こども食堂によく来ていた、4歳から8歳の3人きょうだいがいる、くみこさんご家族との出来事についてお話しいただきました。

登場人物

- ・カズヒロさん(運営者)
- ・くみこさん
(3人きょうだいのお母さん)



● カズヒロさんとくみこさん一家との出会い

PTAの役員の間で、くみこさんの子どもたちが「家庭でご飯を食べていないのではないか」という噂がありました。カズヒロさんはその噂が以前から気になっていて、校長先生とも折々に話をしていたそうです。しかしカズヒロさんは、噂は誇張されやすいものだと思っていたこともあり、くみこさんになかなか声をかけられなかったようです。

そんな時にカズヒロさんは、校長先生から「学校の中のことは把握できますが、地域のことは我々には分からないので、地域の人たちが気にかけてくれると我々も助かります」と言われたことがきっかけとなり、近所の方と一緒にこども食堂を始めることになりました。そしてそのチラシをくみこさんの家に持って行ったことが、カズヒロさんとくみこさん一家との付き合いの始まりとなりました。

MEMO /

地域づくりに関わる人たちが「顔の見える関係」でつながっているところがとても魅力的です！まず地域の大人たちがつながることが、多くの子どもたちとつながるきっかけになることを再認識しました。

● “いざ”という時に、頼られる存在に

カズヒロさんがチラシを渡して以降、くみこさんと子どもたちはカズヒロさんのこども食堂にずっと通って来ていました。

2年ほど過ぎたある日、突然くみこさんが子どもたち3人を連れて、カズヒロさんのもとへ、家出をしてきました。話によると、くみこさんの夫が仕事に行き詰まり、酔っ払って子どもに手をあげてしまったことがあり、子どもたちと一緒に家を出てきたようでした。ひとまず親子4人はこども食堂で食事をとりながら、カズヒロさん宅で寝泊まりするという生活が4日ほど続いたそうです。

カズヒロさんは、時間をかけてくみこさんや子どもたちと関係性を築いていったことで、“いざ”という時に頼られる存在になれたのでは、と感じています。

● 行政の相談窓口との連携

カズヒロさんはくみこさんたちが家出して来てからすぐに、市役所の子育て相談窓口へ連絡をしました。そこにはカズヒロさんが普段からよく情報共有や相談をしている職員がいるので、今回もその人との連携を図りました。そして、くみこさん一家には虐待の恐れがあると市役所が判断したため、警察や児童相談所へと連絡が行きました。そこから市役所の子育て相談窓口を中心として、家族での話し合いの場が何度も設けられ、カズヒロさんを含めての意見交換が行われました。

MEMO /

虐待などが疑われる場合、くみこさん家族へのアプローチはとても難しいと思います。信頼関係が築けていない専門職がいきなり訪問しても、余計に関係性が壊れてしまう可能性があるかと思います。この事例では、普段から信頼関係が構築されているカズヒロさんが中心となり、専門職がバックアップに回ることなくみこさんととても良いつながりができていたと感じました。

“アンテナ”としてのこども食堂

CASE 03

● 生活の立て直しとテーブル作り

くみさんと子どもたちは一時的にくみさんの実家に拠点を移し、元の家に残ったくみさんの夫はカズヒロさんなどの助けを借りてゆっくりと生活環境を整えていくことになりました。カズヒロさんと、「もうお酒を飲みすぎて家族に迷惑をかけることはしない」という約束を交わし、カズヒロさんの勧めで再び働き始めることにもなりました。

その後、くみさん一家の生活の立て直しのために、カズヒロさんはくみさんの家の片付けも手伝いました。その際にカズヒロさんとこども食堂のスタッフでテーブルを作り、くみさんたちにプレゼントしました。カズヒロさんと子どもたちは「このテーブルの上はいつもキレイにしよう」と約束し、テーブルクロスをかけたそうです。

すると子どもたち3人は、学校から帰ってきたら自然とテーブルに宿題を広げてやり始めるようになりました。その光景を見たお母さんは、「初めて子どもたちが自分から勉強を始めた」と感激して喜んでいたのでした。

● 長い付き合いがあるからこそ

「家庭の事情が色々あったとしても、こども食堂ではただ楽しく過ごしてくれれば良い」という思いから、カズヒロさんは基本的にはそれぞれの家庭環境についてあまり踏み込まないようにしていました。しかし今回、くみさん一家の家庭に関わられたのは、それまでの長い付き合いがあったからこそだと強調していました。カズヒロさんは、「素人だから急には入り込めないが、それがいい時もある」と、こども食堂ならではの関わり方をしていることを教えてくれました。

MEMO /

自宅の片づけを通して、くみさん一家とスタッフが1つのチームになっていると感じました。近くに寄り添い、同じ方向を向くことでくみさん一家は安心を感じているのではないかと思います。

● 専門機関との連携と“アンテナ”の役割

カズヒロさんは、こども食堂を始める以前から登下校の見守りの旗振り活動に参加していたため、学校の先生と面識がありました。そのような縁もあり、こども食堂のチラシに、校長先生から「校長先生も応援しています」とコメントを掲載してもらうこともありました。そのおかげで、こども食堂に対する地域の信頼度が一気に高まることとなったそうです。また市役所の職員の方とも研修会で知り合っていたため、くみさん一家のことを相談した時はスムーズに連携を取ることができました。

しかし、子どもに関わる専門職がたくさんいる中で、カズヒロさんがつながれていない専門職もまだまだ多くいます。カズヒロさんは、「行政では難しい”アンテナ”の役割を、こども食堂がしている」と考えており、だからこそ、こども食堂はより多くの人とつながっておくことが大事なのだと強く感じているとのことでした。

MEMO /

こども食堂の中で安心してご飯を食べたり何気ない会話をする中で、困りごとの話が出てきたり、ネグレクトや虐待が疑われるケースなどが分かることがあると思います。そのような情報をキャッチする「アンテナ」の役割は、まさにこども食堂の強みであると感じます。



by 岩垣

このエピソードを読んで

今回のエピソードでは、家出してきたくみさん一家をカズヒロさんは4日間受け入れていましたが、「こども食堂がここまでやるべきなのか」あるいは「どこまでやったほうがいいのか」といった悩みには様々な意見があり、絶対的な正解はないですね。ただ今回は、カズヒロさんはくみさんにとって頼れる存在だったんだと思います。

こどもの居場所・地域の駆け込み寺

CASE 04

タカフミさんは、行政の職員として勤務しており、「援助を必要としている子どもに対して適切な支援を届けるにはどうしたらよいのか」という課題感を以前から持っていました。そして数年前に知り合いの専門職の方と一緒に、児童委員や学校相談員が子どもたちを紹介して来る個別ケア型のこども食堂を始めました。今回は、タカフミさんのこども食堂に中学生の時から通い始めたけんとかんのことについて、話を聞きました。

登場人物

- ・タカフミさん(運営者)
- ・ハヤシさん
(けんとかんの学校の相談員)
- ・けんとかん(中学3年生)

● 学校にも家にも居場所のなかったけんとかん

けんとかんは中学3年生の時、学校相談員のハヤシさんからの紹介でタカフミさんのこども食堂に始めました。けんとかんの家庭は父子家庭でしたが、お父さんはけんとかんに関わろうとせず、学校もお父さんとはコミュニケーションが取れずにいたそうです。また、けんとかんは家での生活リズムが崩れていたため頻繁に学校に遅刻しており、担任の先生との折り合いも悪く、中3になってからは、学校にほとんど通えていませんでした。

ハヤシさんは、けんとかんを見守ってくれる大人がいないう状況やけんとかんの生活を心配して、知り合いであるタカフミさんのこども食堂にけんとかんを連れていきたいと考えていました。しかし、初めのうちはハヤシさんが誘ってもけんとかんはこども食堂に行くのを断っていました。

MEMO

アウトリーチを重ねることが信頼関係をつくるうえでも大事だというのはよく分かっているけど、時間の制約で理想通りに進めないこともありますよね。

● 学校でも家でもない居場所

ある時、ハヤシさんが父親の代わりにけんとかんと一緒に高校の学校説明会に行ったことがありました。その帰り道に、ハヤシさんの誘いを受けて、けんとかんは初めてタカフミさんのこども食堂を訪れることになりました。そしてそのことがきっかけとなり、その日以降もけんとかんはこども食堂に参加するようになったそうです。

けんとかんの家では、お父さんは食卓に食材を置いておくだけでご飯を作らないことがほとんどだったそうです。そのためけんとかんは、こども食堂でおかわり自由のご飯が無料で食べられるということが嬉しかったようです。けんとかんはいつの間にか食堂に毎回参加する常連になっていました。

そして、みんなでご飯を食べて同じ時間を過ごしていくうちに、けんとかんは自身の家庭のことを、タカフミさんやスタッフにぼつりぼつりと話すようになっていきました。けんとかんが自分の話をしてくれるようになったのは、**老若男女様々なスタッフがいて、その全員が頭ごなしに否定せずに傾聴する姿勢が取れていたからではないかと、タカフミさんは考えているそうです。**

こども食堂に通い始めた頃は寡黙でとげとげしい印象だったけんとかんも、気付けばタカフミさんや他のスタッフ、子どもとも分け隔てなく話すようになったり、自分の友達を連れて来るようにもなりました。こうしたことからタカフミさんは、「この食堂はけんとかんにとっての『居場所』になったんだな」と感じるようになったそうです。そして、その頃から、タカフミさんもけんとかんに対して少し踏み込んだ関わりをしていくようになりました。



MEMO

いっしょにご飯を食べてゆっくりとした時間を共有して、目的なく他愛のない話をするこつて、専門機関だとなかなかできないですね。

こどもの居場所・地域の駆け込み寺

CASE 04

● けんとかんの高校受験

けんとかんのお父さんは、お金に全く余裕が無いわけではないものの、けんとかんの高校受験に反対していました。けんとかん自身も当初は高校進学にあまり前向きではありませんでしたが、タカフミさんやハヤシさんと具体的な将来の話をするうちに高校への進学を強く希望するようになりました。

けんとかんが高校進学を志望するようになったことで、ハヤシさんや担任の先生がお父さんを説得するように動いてくれました。その結果、けんとかんは高校を受験できるようになりました。

けんとかんの中学校の成績は良い方ではありませんでしたが、こども食堂で面接の練習をするなど周囲から様々な協力を受け、万全の状態受験に臨むことができました。その結果、タカフミさんたちの応援の甲斐あって、市内の定時制高校に合格し、無事に高校進学をすることができました。

MEMO /

いろんな職種の人から仕事の話聞けるのは、けっこう贅沢な機会ですね。

● 新たな生活の支え

無事に高校に入学したけんとかんでしたが、父親との関係は依然として悪かったようです。高校の学費は父親が払っていたものの、それ以外のけんとかんの生活に対して父親は全く関与しない状態だったそうです。

また一方でけんとかんは、コロナ禍の休校の影響もあり学校に行く意欲が徐々になくなってしまったこと、学校の先生と確執が生じてしまったことなど様々なことが原因で、高校を退学することになりました。

そしてこの機会にけんとかんは、タカフミさんを始めとした多くの方の協力のもと、単身世帯として生活保護を受給しながら新たに生活を始めることになりました。けんとかんは、タカフミさんのこども食堂の近くのアパートに新たな住まいを構えることになったため、今でも毎回こども食堂に参加しているそうです。

● タカフミさんのこども食堂は地域の駆け込み寺!?

タカフミさんは行政の職員であり、社会福祉士の資格もあるという信頼から、学校相談員や地域の主任児童委員からの紹介のもと、「困りごとを抱えた子」につながるケースも少なくありません。例えば「家で食事が満足に取れていない」「家や学校に居場所がない」などの事情がある子どもたちです。そういう意味で、タカフミさんのこども食堂は、学校相談員や主任児童委員にとっての『駆け込み寺』のような、地域に必要不可欠な存在になっています。

またタカフミさんは、子どもたちの人生に伴走し、子どもたちの代弁者となれるよう意識して、こども食堂を運営しているそうです。「多くの子どもたちが社会から抑圧され、自分の意見を主張する場を奪われがちです。そんな子どもたちが伝えたくても伝えられないことを、社会に対して伝えられる大人でありたい」とタカフミさんは考えてます。



MEMO /

自分の理想とする実践は業務範囲が決まっている職場だとやりづらいですが、こうやって職場以外のところで自分自身に納得できる実践ができるというのはうらやましいです。

このエピソードを読んで

by 野田

専門職として必要な社会資源を作り出す「ソーシャルアクション」の実践として興味深く読みました。職場だけでなく、ボランティアな活動をうまく活用して専門職としてのあるべき取り組みを模索している姿は学生にも紹介したいと思いました。もうひとつは、自分がよいと思っても、そこをグイグイ押し付けるのではなく、子どものペースに合わせて進めていることです。「伴走」という言葉が当てはまると思いました。

気付きの起点となる場所！

CASE 05

タツヤさんは、複数の場所を拠点に、週に5日こども食堂を開催しています。近隣の小学校でチラシを配ってもらっているなど地域内でも広く認知されており、タツヤさんのこども食堂は多くの人にとっての大切な居場所になっています。

今回はタツヤさんのこども食堂の常連であるなるみちゃんとお母さんについて、話を聞きました。

登場人物

- ・タツヤさん(運営者)
- ・なるみちゃん(小学1年生)
- ・なるみちゃんのお母さん

MEMO /

複数のスタッフの目で、子どもたちを見守るからこそ、なるみちゃんの「ちょっと気になる」反応に気づけたのかもしれないね。

● 常連のなるみちゃん

なるみちゃんは小学校1年生の時からタツヤさんのこども食堂に来ていました。なるみちゃんは小学校に入学してすぐにこども食堂に通い始めましたが、気付けばあっという間にこども食堂の常連になっていきました。なるみちゃんは、一人で、もしくは友達と一緒に参加していましたが、帰るときは必ずお母さんが迎えに来ていました。なるみちゃんが常連だったこともあり、タツヤさんとお母さんは、お迎えの時に毎回顔を合わせるうちに、気兼ねなく世間話をする関係性になっていました。

なるみちゃんがこども食堂に通い始めてから数カ月間は、タツヤさんや食堂のスタッフから見て、なるみちゃんとお母さんの二人が何か困りごとを抱えているようには感じなかったそうです。

● 衣替えの季節に

季節が夏になり、衣替えが必要になってきたある日のこと。なるみちゃんとスタッフが遊んでいると、なるみちゃんが突然「殴らないで」と言って、スタッフに対して過剰な反応を示したそうです。また、よく見てみると、半袖半ズボン姿のなるみちゃんの身に痣のようなものが見受けられたそうです。

● 気付きを起点に行政とつながる

気がかりに思ったタツヤさんと食堂のスタッフは、その日からなるみちゃんとお母さんのことを注意深く見守るようになりました。すると、この頃なるみちゃんのお母さんがしばしばお酒を飲んだ状態で迎えに来ていること、また最近になってその頻度が多くなってきていることが分かりました。

心配に思ったタツヤさんは、女性スタッフを通して、なるみちゃん本人に身体の痣について聞いてみました。なるみちゃんは「痣はお母さんに殴られてできた」と答えたそうです。このことをきっかけにタツヤさんは、なるみちゃんとお母さんを市役所の子ども家庭福祉担当の部署につないで、必要な支援が受けられるように連携を図りました。

タツヤさんは、今回のことをこども食堂だけで抱え込むのはリスクがありそうだと感じ、また必要な連携を早く取らないと事態がもっと大きくなる可能性があると考えたため、迅速に行政との情報共有を行いました。



MEMO /

今回のエピソードでは、タツヤさんやスタッフの方々の常日頃からの関わりが、なるみちゃんの言葉を引き出したのかもしれないと感じました。

気付きの起点となる場所

CASE 05

● 地域みんなで成長を見守る

なるみちゃん一家について詳しく話を聞いてみると、どうやらなるみちゃんはお母さんとおばあちゃんと3人で暮らしていること、お母さんが最近仕事を辞めざるを得なくなってしまったため、おばあちゃんの年金だけを頼りに生活していたということが分かりました。

しかし、タツヤさんを経由して行政とつながってからは、なるみちゃん一家は生活保護や就労支援の利用にまで至ることができたとのことです。また、公的支援につながったことが学校にも伝えられたことで、学校も今まで以上になるみちゃんを見守るようになったそうです。

なるみちゃんは今現在、小学校3年生となりましたが、前と変わらずこども食堂に通ってきており、いつも元気な姿を食堂のみんなに見せてくれています。タツヤさんとお母さんの関係も以前と変わらぬまま続いており、お母さんがなるみちゃんを迎えに来た時には他愛のない話をしたり、時にはそれぞれの近況について情報共有や相談をするような間柄が築かれています。

こうして、なるみちゃんとお母さんのことを見守ってくれる人が周りに増えたこと、また家族に適切な公的支援が提供されるようになったことで、なるみちゃんの身体に新しく瘻ができることも、お母さんがお酒を飲んで迎えに来ることもなくなったそうです。

MEMO /

スタッフとの他愛のない会話が、なるみちゃんのお母さんにとって大切な時間になっているんですね。

● 「この子のために何ができるか」でつながる

子どもの個人情報を持っており普段子どもが過ごす場所である学校とのつながりも、タツヤさんは強く意識しているそうです。最近では若い先生方もこども食堂のことを知ってくれていて、お互いのことを信頼して活動しています。

こども食堂と行政、学校などの関係者が、「この子のために何ができるか」を一緒に考える関係を作っているそうです。

● 些細なことから変化に気付く

多くの子どもが、「何かあったの?」と聞いても「別に」くらいの言葉でしか答えられないため、実際には子どもの異変や困りごとはなかなか気付きづらいそうです。しかしながら、そうした中でも子どものちょっとした変化に気付けるように、注意深く見守り想像力を働かせるということ、タツヤさんはスタッフ全員とともに心掛けているそうです。例えば、終了時間になってもなかなか帰ろうとしないことなど、ちょっとした態度や言動の変化から、子どもの『困りごとのシグナル』を見つけられるよう尽力しているとのことでした。



MEMO /

学校などでない限り、子どもに直接会って、その変化が分かるほどに付き合っていけるということはなかなかできないです。

このエピソードを読んで

by 野田

専門機関は家族を個別に扱って支援することが多いです。なので、子どもと親がいっしょに居られる場・立ち寄れる場が日常的にある、というのはとても貴重だと思います。ご飯を食べに行く、友達と遊ぶ、というのを口実にしながらも、何かあったら共感してくれる、助けてくれる人たちとの関係がつかれることが分かりました。

つながる・寄り添う・見守る

CASE 06

サチコさんは児童相談所や福祉事務所、療育センター等に勤めた豊富な経験があり、誰でも気軽に参加できる居場所をつくりたいという想いから、仕事を続けながらこども食堂を立ち上げました。

今回は、立ち上げのときから継続的に関わっていた、1歳から6歳までの4人の子どもを持つ若いお母さんであるゆうかさんのことについて話を聞きました。

登場人物

- ・サチコさん(運営者)
- ・ゆうかさん(4人きょうだいのお母さん)



● サチコさんとゆうかさんとの出会い

サチコさんとゆうかさんは、サチコさんの仕事の関係で、ゆうかさんが小学生のころから顔見知りでした。そしてある時偶然、当時10代後半のゆうかさんと街中で再会しました。ゆうかさんが妊娠中だったということもありサチコさんは声を掛けましたが、その時は連絡先を交換しませんでした。それから1年以上経ち、今度は2人目の子どもを妊娠しているゆうかさんをサチコさんがたまたま街で見かけ、今度こそぜひつながりたいと思い、連絡先を交換しました。

サチコさんはゆうかさんと連絡をとるようになってから、ゆうかさんを自身が手伝っていたこども食堂に連れて行くようになりました。その後、サチコさんが自らこども食堂を立ち上げてからは、ゆうかさんは定期的にサチコさんのこども食堂へ参加するようになりました。

MEMO /

1度だけではなく、繰り返し声をかけることで「あなたが大切だ」という想いは必ず伝わると強く感じました。

● ゆうかさんとの信頼関係

ゆうかさんは、こども食堂に参加するようになった当初は、子どもに対しての愛情の強さゆえに、1秒たりとも子どもを他人に預けたくないと考えていました。しかしサチコさんたちとの長期間の関わりの中で子どもたちがスタッフと親しくなっていき、ゆうかさん自身もサチコさんやスタッフに段々と心をひらくようになったことで、こども食堂に安心して子どもを預けられるまでになったそうです。

MEMO /

不安を感じている参加者との信頼関係の構築は難しいですね。サチコさんやスタッフから受ける安心感で、ゆうかさんは「この食堂の人は信頼していいんだ」と心を開いてくれたのだと感じました。

● ゆうかさんの子育てに寄り添うサチコさんの関わり

ゆうかさんが4人目の子を妊娠していたときはちょうど新型コロナウイルスが流行し始めた時期でした。そのため子どもたちを病院に連れていくことができず、ゆうかさんが健診で病院に行くときは、同居中の元夫が仕事を休んで子どもたちの面倒を見なくてはなりませんでしたが、しかし収入を考えると頻りに休むこともできず、そもそも希望通りに休みが取れないこともありました。

心配に思ったサチコさんは、こども食堂スタッフで手分けをして、ゆうかさんが不在の時に家で子どもの面倒を見る、そしてゆうかさんの健診のため病院に付き添うという形でお手伝いをしたそうです。出産に際して、3日間家を空けなければならなかった時も、スタッフが訪問して子どもの面倒を見ていたそうです。そのような支援のおかげもあり、ゆうかさんが無事に産を終えることができ、出産の喜びをスタッフ全員で分かち合うことができました。

MEMO /

サチコさんやスタッフのゆうかさんへの「熱い思い」にはたいへん感銘を受けました。また、この「思い」がこども食堂内で共有され、以心伝心のチームワークで支援が行われている点が素晴らしいです！

つながる・寄り添う・見守る

CASE 06

● ゆうかさんの意思を大切にしたり

サチコさんはゆうかさんとの関わりに際して、少年サポートセンターや病院とも連携を取っており、定期的に情報交換をしていました。またその他にも、サチコさんが社会福祉協議会や、婦人相談所・児童相談所にもゆうかさんをつなげようとしたことが、最終的には制度利用には至りませんでした。

ゆうかさんが支援制度の利用を断った理由として、ゆうかさんは今まで誰にも頼ることなく1人で生き抜いてきたので、人から指示されたり指導されたりすることを受け入れられなかったためではないかとサチコさんは考えています。

またサチコさんからすると、ゆうかさんの状況を客観的に見た時、「生活の立て直しのために一旦子どもを施設に預けた方が良さのでは」とも思える状況ではありましたが、そうしてしまうと家族全員の生活がダメになると考え、**こども食堂においてはあくまでボランティアの立場から、ゆうかさんの意向を尊重して関わりました。**

ただし、起こりうる様々な事態を想定して、サチコさんは児童相談所と家庭児童相談室には頻繁に状況報告をしていたとのことでした。

● 現在のゆうかさんとの関係

ゆうかさんは現在、当時住んでいた場所から転居してしまったため、サチコさんのこども食堂からは離れた土地で暮らしています。物理的な距離もあるためこども食堂にも参加できてはいませんが、サチコさんやこども食堂の方々とはSNSを通してやり取りをしています。困りごとを相談するなど未だにサチコさんたちを頼りにしてくれており、距離は離れているものの付き合いは長く続いています。

\ MEMO /

転居や親の都合で、こども食堂に参加できなくなってしまうことは避けられないですね。そのような中でも、「SNSでつながり続けていること」が保護者にとってどれだけ心の支えになっているかを改めて考えるきっかけになりました。

● それぞれの限界と歩み寄り

サチコさんは行政機関の職員とこども食堂の運営者のどちらの経験もあるからこそ、行政の守備範囲をある程度理解しており、その守備範囲を越えてこども食堂が問題を抱え込んではいけなく考えています。自身が勤めているからこそ行政・専門機関にも限界があることを感じていますが、だからといってこども食堂が全てを担えるわけではないため、こども食堂側が自分たちの守備範囲を行政に伝え、お互いに歩み寄っていくことが重要なのではないかと考えているそうです。

また、行政・専門機関と連携する際には、「伝え方」も重要になるとサチコさんは考えています。感情的な言葉や推測だけでは行政も動くに動けない場合があるため、具体的な事例として事実を淡々と伝える形で連絡・相談がなされることが、行政・専門機関のためにもなるとのことでした。



\ MEMO /

行政や社会福祉協議会がどんな仕事をやっているのか、何が得意で何が苦手なのかを知ると、連携の仕方も変わってくると思いました。情報交換を常に行ったり、行政OBの方に活動に加わっていただくことも大切だと感じました。

by 岩垣

このエピソードを読んで

多くのこども食堂で専門職との連携が行われていますが、この事例ではお互いが「強み」と「役割」を意識して連携しているところが特徴であると感じました。サチコさんがゆうかさんと信頼関係を築き、それぞれの支援機関の「強み」と「役割」を意識した上でつなぎ先を選択することで、担当者も必要な制度の検討が行いやすくなっていると思います。

「わたしが倒れたら、この子見てくれる？」

CASE 07

ヒロコさんのこども食堂は、子どもだけでなく親子で来てほしい、育児で疲れているお母さんにもくつろいでほしいという思いから、“親子食堂”として活動しています。普段ゆっくりする時間がないようなお母さんたちにとって「落ち着いてコーヒーが飲める場」や「準備や片付けに追われずに美味しいものを食べられる場」、そして「情報交換や悩み相談の場」になれるよう心掛けて、ヒロコさんはこども食堂を運営しています。

また、ヒロコさんのこども食堂はフードバンク・食糧支援も行っており、まりかさんとはその食糧支援の活動を通して出会うこととなりました。

登場人物

- ・ヒロコさん(運営者)
- ・まりかさん(小学生の娘さんがいるシングルのお母さん)

● 着の身着のまま、知らない土地で

まりかさんは、ヒロコさんと出会った当時は、夫のDVから逃れるために娘と2人で他県からやってきて母子生活支援施設で生活をしている状況でした。子どもと自分の身を守ろうと、ほとんど着の身着のまま家を出てきて施設に入ったため、荷物は必要最小限しかなく、近くに頼れる人が誰もいない環境で生活をしていました。

そんな中、まりかさんは、自身の施設に対してヒロコさんが食糧支援を申し出てくれたという話を聞きました。そのため、まりかさんはヒロコさんに直接連絡を取って、支援をしてもらえるようお願いしました。そしてヒロコさんから個別に食料を送ってもらうことになりました。

また、ヒロコさんの誘いがきっかけで、まりかさんは娘さんと一緒にこども食堂にも参加するようになりました。

MEMO /

専門機関の支援で完結せずに、外部(地域)の資源とつながるというのは関係が広がっていいですね。

● 小さな毎日の積み重ね

ヒロコさんが誘って以降、まりかさんはこども食堂に毎回来ていました。ヒロコさんの方から積極的にまりかさんの事情に立ち入ることはしていませんでしたが、一緒にご飯を食べたり話したりすることを繰り返していくうちに、まりかさんは自身の困りごとや悩みを遠慮なく打ち明けてくれるようになりました。逆にヒロコさんもまりかさんから相談を受けたことで、まりかさんに信頼してもらえていることを認識できたとのことでした。

● 新しい生活! しかし…

まりかさんと娘さんが暮らしていた施設は、入居期間が原則2年と決まっていたため、まりかさんは2年の間にひとりで子育てをしながら仕事や住む場所を見つけ、引っ越し等のためのまとまったお金を作る必要がありました。非常に大変ではあったものの、まりかさんの努力とヒロコさんのサポートにより、入居期間の2年を無事に終えることができ、まりかさん母子の新たな住居での生活が始まることとなりました。

しかし、そんな折に新型コロナウイルスが猛威を振るう事態となってしまいました。まりかさんは飲食店で働いていたためコロナ禍において仕事が半減してしまい、とても苦しい生活を強いられることになってしまいました。



MEMO /

専門サービス利用後のサポート(アフターケア)をどうするかは、いろいろな領域で課題になっていきますよね。

「わたしが倒れたら、この子の面倒見てくれる？」

CASE 07

● 「わたしが倒れたら、この子の面倒見てくれる？」

一方で、ヒロコさんのこども食堂も、コロナ禍の影響により、集まって食べる形式から、お弁当の配布に切り替えて活動をしていました。

そんなある日、まりかさんがヒロコさんのこども食堂へ、お弁当を受け取りに来ました。その時のまりかさんは痩せて棒のようだったそうで、いつ倒れてもおかしくないとヒロコさんは感じました。まりかさんはたった一人で娘さんを育てており、「自分が倒れたら生活が破綻してしまう」とずっと独りきりで頑張っていたのです。

またその頃まりかさんは、手術が必要な病気を患ったために数日間入院をしなければなりませんでした。それに加えて、コロナ禍の影響で入院中に子どもを預かってくれる機関がどこにもなかったようで、子どもの世話を頼める人を探して奔走することとなったそうです。

そんな折、様々なことへの不安からまりかさんは、「わたしが倒れたらどうしよう。ヒロコさん、もしそうになったら、この子の面倒見てくれる？」と口にしたそうです。それに対してヒロコさんは、「いいよ、任せな。連れてきなよ」と返しました。結果的にはヒロコさんがまりかさんのお子さんを預かることにはなりませんでしたが、今回の件を経てヒロコさんは、ひとり親が抱える計り知れない苦勞を目の当たりにすることとなったそうです。

まりかさんとヒロコさんも、今では3年以上の長い付き合いになっています。こども食堂で一緒に食卓を囲むことは、コロナ禍の影響で依然として出来ていませんが、お弁当配布の機会を通じて近況などを確認し合っているそうです。

MEMO /

「任せな」という言葉、ずしんときます。専門機関で働いているとなかなか言えないです。

● 困りごと相談のワンストップ窓口

「こども食堂は、貧困の子どもにご飯を食べさせるだけというイメージが世間的には強いかもしれないけれど、本当は親子の小さな『SOS』をキャッチするのにすごく向いている」とヒロコさんは感じています。その理由として、「一緒に食べたりお喋りすることを通じて、支援者・相談者の関係を越えた「人」と「人」同士の関係性が少しずつ積みあがっていくからではないかと考えているそうです。

そして、雑談の中でぼろっと出てくる家庭の事情や困りごとをキャッチして対応できるように、ヒロコさんは、子育て・貧困・高齢者の生活支援などの全部が横につながる仕組み作りを目指しているそうです。そして、そのためには行政との連携は必要不可欠だと考えているとのことでした。



MEMO /

職場だと支える側・支えられる側の関係が当たり前のように固定されていますよね。それに違和感をもつこともなくなっていく…。

このエピソードを読んで

by 野田

「いいよ、任せな」という言葉は、こども食堂で結ばれる人間関係を象徴しているように感じました。専門機関だと責任をとれないような発言はするべきではない、という考えが先行しますし、実際慎重に言葉を選ぶと思います。「いいよ、任せな」と言われて生活のすべてを頼れるとは、まりかさんは思っていないはずです。そうではなく、そういう気持ちを示してくれる人がここにいる、ということを経験したこと、それは大きな安心感になるはずです。孤独でも孤立でもない、そう感じさせてくれる場だと思いました。

多世代の人々が交差する場

CASE 08

キョウコさんが運営するこども食堂は、地域の様々な人たちとの出会いや協力が積み重なったことで開催に至ることができました。今回は、こども食堂を始めることができた経緯と、いつも参加してくれているスタッフや子どもたちのことについて、運営者のキョウコさんから話を聞きました。

登場人物

- ・キョウコさん(運営者)
- ・かよさん(こども食堂スタッフ)



● 社協を中核とした出会い

キョウコさんは、行政が開催したこども食堂に関する講演会に参加したことがきっかけで、自分自身でこども食堂を始めたいと思うようになりました。しかしながら、一人だけでどうやって始めれば良いのか、また何から手をつければ良いのかがまったく分かりませんでした。そこで、自分がこども食堂を運営したいと思っていることを、知り合いや力になってくれそうな人に片っ端から伝えることから始めました。

すると、ひょんなことから、地域の社会福祉協議会(社協)の職員の方と知り合いになることができました。そしてその社協職員の紹介により、地域のガス会社と地域の内科医の先生と出会うこととなりました。

MEMO /

社会福祉協議会(社協)には、地域活動における様々な情報や人が多く集まっていますよね。社協がきっかけとなってこども食堂などの地域活動が始まることも多く、頼りになる存在ですね。

● 次々とつながっていく地域の縁

そのガス会社は自社のスペースを活用してこども食堂を開催したいと以前から考えており、また内科医の先生は高齢者の居場所が地域にできることを望んでいました。そして、社協の働きかけによって三者が出会い、それぞれの希望を叶える形としてこども食堂が始められることになりました。

ガス会社からは開催場所の提供や運営のサポートをしてもらい、内科医の先生には衛生管理や感染症対策の指導をもらえることになりました。また、地元の農家やフードバンク、スーパーマーケットなども、キョウコさんのこども食堂に協力したいと名乗りを上げてくれて、廃棄野菜の寄付や安価での食材提供を受けられることにもなりました。

こうして社協職員、ガス会社、内科医の先生などを始めとした地域の様々な人々の支えもあり、キョウコさんはこども食堂の開催を実現させることができました。コロナ禍でのスタートであったにもかかわらず、初回から無事に、大盛況のうちに終えることができたそうです。

MEMO /

こども食堂が社協とのつながりを契機に、地域の多様な方々とのご縁を結び、活動の幅が広がっているんですね。

● 高齢者の居場所にもなるこども食堂

キョウコさんに協力してくれている内科医の先生は、「高齢者が参加できる居場所や高齢者が輝ける場所が地域にあってほしい」と考えているそうです。そのため、自身の内科に通院している高齢の患者の中で、こども食堂に興味があるという人たちに対して、キョウコさんのこども食堂への参加・手伝いの声掛けを行っています。そのような経緯でこども食堂のボランティアスタッフをやっている人の中に、かよさんという方がいます。

多世代の人々が交差する場

CASE 08

● ボランティアのかよさん

かよさんは内科医の先生の紹介がきっかけで、旦那さんと2人で一緒にこども食堂のお手伝いすることになりました。かよさんはこども食堂に来始めた当初、軽度の認知症を患っているためか、スタッフや子どもたちが話しかけてもあまり反応がありませんでした。キョウコさんは内科医の先生から紹介を受けていたため、かよさんの様子に特段驚くことはありませんでした。一方で子どもたちは、かよさんのところに食べ物などを持って行っても反応が無いので、しょんぼりしたような顔で戻ってくることも多かったそうです。

● 多世代交流がもたらす変化

しかしある時、いつものように子どもたちがかよさんに話しかけると、かよさんから子どもたちに笑いかけてくれたことがあったそうです。それ以来、次第にかよさんから笑顔が見られる機会が増えていくようになりました。そして今では、子どもたちの姿をニコッと笑いながら見守ってくれていることも多いそうです。さらに、かよさんが笑いかけられるようになってからは、子どもたちは以前よりもかよさんと接する機会が多くなり、より積極的にかよさんの作業をお手伝いをするようになりました。

キョウコさんはこのことを通じて、子どもたちが「自分も誰かの役に立てる」という自信を持てるように変化していく姿を目の当たりにしました。自分の思いからスタートしたこども食堂が、「人と人とのつながりをきっかけとして笑顔が生まれる場所」となったことに、大変感銘を受けたそうです。

MEMO /

多世代交流が持つ力は、私たちの想像をはるかに超えていくといつも思います。子どもたちの持つ笑顔やあどけない振舞いがかよさんに届き、それに対してかよさんも笑いながら話しかけることでお互いに支え合っている。最近「ごちゃまぜ福祉」なんてことが言われたりしますが、改めて多世代交流っていいなと感じますね。

● 「縁」でつながるこども食堂

キョウコさんは、自分のようにこども食堂をやりたいと考えている人や、ガス会社や内科医の先生のようにこども食堂の開催に協力したいと考えている人は、想像以上にたくさんいるのではないかと考えているそうです。一方で、キョウコさんたちにとっての社協職員のような働きかけがなければ、そもそもそのような人たちが出会うことも容易ではないと自身の経験を通して感じました。そのため、自分たちがこども食堂の開催にまで漕ぎつけることができたのは、良いご縁があったに過ぎないともキョウコさんは思っています。そして、良い縁に巡り合えるチャンスを少しでも増やすためには、自分の想いを周囲に伝えることから始めるのも一つの手であると感じているそうです。



MEMO /

図らずも多世代交流の場となったこのこども食堂は、たった1人の想いを発したところから始まったのだと考えると、感慨深いです。

このエピソードを読んで

by 岩垣

社会福祉協議会の職員さんとの出会いや多世代交流に対する気づきなど、活動を通して「つながることの大切さ」を実感しているところがとても素敵だと思います。つながることで活動がどんどん広がり、楽しみ・ワクワクも増えてくる。こども食堂にはそんな魅力もあると改めて感じました。

ママ友として関係を築く

CASE 09

カズコさんは子育て支援を重点に置いたこども食堂を運営しています。またカズコさんの妹さんが社会福祉士の資格を持っているため、専門性を有したスタッフとして定期的に食堂を手伝ってもらっています。

今回は一人の娘さんを持つふみえさんとの出会いを中心に、カズコさんから話を聞きました。

登場人物

- ・カズコさん(運営者)
- ・エリさん(こども食堂スタッフ)
- ・ふみえさん(小学6年生の娘さんがいるお母さん)

● カズコさんとふみえさん

ふみえさんは、自身の職場のすぐ近くにカズコさんのこども食堂があったことがきっかけで、娘さんと一緒にこども食堂に参加するようになりました。最初は一人の食堂利用者だったふみえさんですが、子育て経験のあるカズコさんと関わっていくうちに、次第にママ友のような関係になっていきました。ある時、2人が何気ない連絡をする中で、ふみえさんが「相談相手がなくて辛い」という言葉をもらったことがありました。それを受けたカズコさんは、「私いまアイスが食べたいから、一緒に公園でアイス食べない?」とふみえさんを誘い、外で2人で話すことにしました。ふみえさんは、カズコさんが優しく話を聞いてくれたことで、カズコさんに相談相手になってほしいと感じたということ率直に打ち明けてくれました。そして、自身がひとり親になった経緯や家庭の事情などについてカズコさんに話してくれたそうです。

MEMO /

アイスを食べながら話すなど、リラックスした雰囲気を作り出せるのはやっぱりこども食堂の強みですね！専門機関の相談窓口は敷居が高いというか、気軽に相談に行けないですよ。

● ママ友として悩みを聞く

ふみえさんは今ではカズコさんに気軽に心の内を打ち明けてくれており、多くのことをカズコさんに相談しています。それまでは、自身や障がいのある娘さんの将来についてどことなく不安に思っていたながらも、「相談するまでもない」と思ってしまういたり、どこに相談すべきか分からなかったこともあり、誰にも打ち明けられずにいました。そんな中で、カズコさんとママ友になり、カズコさんがふみえさんの小さなSOSをキャッチしてくれたからこそ、悩みを打ち明けられ、孤独を味わわずにいられています。

● 増えていくママ友関係

カズコさんがこども食堂の情報をSNSでも発信していることもあり、ふみえさんもSNSを利用し始めました。そんなある日、ふみえさんがSNS上に「寂しい。障がいのある子どもを持っている親のことなんて誰も理解してくれない」と投稿しているのをカズコさんが目にしました。心配になったカズコさんはSNSを通して「あなたは一人じゃないよ」とメッセージを送りました。時を同じくして、ふみえさんと同様に障がいのあるお子さんを持つ、こども食堂のスタッフのエリさんから、ふみえさんを気遣ったメッセージが送られました。

このことがきっかけとなり、ふみえさんとエリさんはどんどん仲良くなっていきました。こども食堂開催時も、同じ境遇の当事者同士として2人で共通の話をしたり、それぞれの気持ちを吐き出したりしているようです。

MEMO /

現場でも、「子育ての悩みを誰にも相談できず孤立してしまう母親(父親)」に多く出会います。特に子どもの発達に関する話題は他の人に話しにくいですよね…。どうやって孤立を防いでいくか、本当に悩みどころだと思います。



ママ友として関係を築く

● 「ちょっと話を聞いてくれる人」になることはできる

カズコさんは、「こども食堂だから」という理由で関わり方に極端な線引きをしたくないと考えています。たしかに、家庭によっては事情が複合的で、専門職でなければ全く手が付けられない場合もあるため、こども食堂としてどこまで家庭の事情に寄り添うかは、カズコさん自身もとても悩んだそうです。しかし、少なからずママ友や親しい友人として「ちょっと話を聞いてくれる人」になることはできる、とカズコさんは考えています。

MEMO /

やっぱりピアサポーターの力はとても大きいですね！同じような経験をした人のサポートがあれば、「自分も頑張ろう」と考えやすくなるかもしれません。こども食堂もそんな場づくりの一助になっているんですね。

● 社会福祉士の妹さんからのアドバイス

カズコさんは、どこまで相手の事情に踏み込んでいいのか悩んだ時に、社会福祉士であるカズコさんの妹さんを頼りにしています。妹さんは、こども食堂利用者が抱える様々な困りごとに対して、それぞれの様な制度や仕組みで支援されているのか、どの機関が担当しているのか等をカズコさんに教えてくれます。そして、踏み込む前に支援機関に一旦確認した方が良いケースや、下手に踏み込まず専門機関に任せただ方がいい場合があることもアドバイスしてくれており、カズコさんの食堂運営に欠かせない役割を担ってくれています。

CASE 09

● おせっかいの範疇を越えない、ママ友としての関わり

妹さんからのアドバイスやこれまでの経験などを踏まえて、カズコさんは今では、「こども食堂で関わる人に対しても、普段のママ友にしないようなことは、しない」という信念を強く持っているそうです。

こども食堂というものは明確な枠組みがなく、どこまでやるべきか・どこまでやっても良いのかが分かりづらい活動ではありますが、カズコさんなりの基軸を持って利用者から悩みや相談を聞き、必要に応じて支援制度などの情報提供を行っているとのことでした。



MEMO /

こども食堂での関わり方には色々なスタンスがあると思います。今回カズコさんが支援者としてではなく、友達として向き合ったからこそ、生まれたエピソードですね。

このエピソードを読んで

by 岩垣

こども食堂が「参加者とどこまで関わるべきか」という悩みはやっぱり答えは出ないですね。私もいつも悩んでいます…。でも、スタッフみんなでしっかり話し合うことが一番大切な気がします。みんなが納得して「よしやろう！」と思えるところまで関わる(たとえ失敗したとしても!)のがいいのかなと思います。専門職がこども食堂への参加者のつなぎを行う際も、それぞれの食堂のスタイルを踏まえた上でつなぐことができるとよいですね。

こども食堂とつながった専門職の声

EXPERT



日本小児科学会理事 森内浩幸さん

コロナ禍において、子どもたちは心身両面にわたって大きなデメリット、犠牲を払っています。こども食堂というのは、とても他では補えないような重要な位置を占めていると思います。子どもにとって、いろんな遊びをすることはある意味では勉強するよりももっともって脳の発達にもよいこと。そして、「あの時いっぱい遊んだな」ということが大人として生きていく上での基礎になってくれると思っています。



弁護士 伊藤由子さん

専門職は「どんな課題や困りごとがあるか」に意識が傾き、支援する側という姿勢が濃くなりがちです。こども食堂の素敵さは、来てくれる人がありのままで、ほっとできるつながりが生まれ、続いていくことだと思います。支援の場面で、このつながりがもつすこさを感じてきました。こども食堂にしかできないエンパワーメントに感謝です！



千葉県立生浜高等学校教諭 石橋正治さん

高校での居場所カフェの立ち上げから、こども食堂運営者の方に手伝ってもらっています。カフェに立ち寄り、こども食堂スタッフから熱々のホットクが手渡された時の、生徒の笑みの愛おしさときたら。コロナ禍により会場内飲食禁止で、持って帰るだけ。でもあえて調理して渡すのは、食べ物と共に届けたいものがあるから。コロナ禍で口には出さずとも苦しんでいる子ども達がいる。この子達に、温かい食べ物と一緒に人の気持ちを、人の温もりを届けたい。負けるな、子ども達！



川口市役所 職員・社会福祉士 石川哲也さん

行政の職員をやりながら、こども食堂を運営しています。基本的には「子どもの味方」であるように心がけています。こども食堂が地域の気軽に行ける場所になればと思っています。行政の支援でも打つ手が無い子どもや家族もいて、専門職の方から相談を受けることも多くあります。こども食堂が社会から求められているんだなあと、実感しています。



堺市社会福祉協議会 地域福祉課長 所正文さん

堺市では60近いこども食堂と連携し持続可能なこども食堂の運営に取り組んでいます。こども食堂は多種多様、自由闊達などの特徴から、当会ではこども食堂同士をつなげる、応援の輪をひろげる、安心できる活動への支援に力点を置いています。



千葉県内勤務 スクールソーシャルワーカー Kさん

温かい食事、栄養バランスが考えられていて季節を感じられる行事食や、愛情のこもったお弁当に助けられている親子がたくさんいます。子どもが歩いて行ける地域の中にあつて、顔が見える関係は大切だと思います。子ども達が困っているのは食事だけではなく、抱えている課題に気づき、必要な支援に結びつけるためには、専門職間の連携が欠かせません。今後も子ども達のよりよい支援のために連携させてください。

ネクストアクション ~何かしたい!とってくれた方へ~

NEXT ACTION

調べてみる

あなたの地域のこども食堂について、調べてみてください。

・市内には何か所ある? >

・一番近いのはどこ? >

・どんなこども食堂がある? >

・いつ、どこでやってる? >

・どんなひとがやってる? >

・どんなひとが来てる? >

調べる方法の例

- [あなたの地域] + [こども食堂] で検索
- 市役所や社会福祉協議会で聞く
- こども食堂ネットワークのHPを見る <http://kodomoshokudou-network.com/index.html>
- ガッコム×むすびえのこども食堂マップを見る(随時更新中) <https://kodomoshokudo.gaccomm.jp/>

行ってみる

まずは一番近いこども食堂を覗いてみてください。こども食堂がどんな場所なのか、あなたの目を見て、一緒にごはんを食べて感じてみてください。

※新型コロナウイルス感染症の影響により、開催を中止したり、活動形態を変えている(フードパントリーやお弁当の配布・宅配)所もあります。訪問前にリアルタイムの活動の様子をご確認ください。

エピソードの登場人物になる

こども食堂の数だけエピソードがあります。ここで紹介したのは、ほんの9つです。あなたの地域のこども食堂にどんな“エピソード”があるのか、今度はあなたのエピソードを教えてください。

おわりに

本冊子で紹介したエピソードは既存の子ども食堂の形のほんの一部でしかありません。そして、すべての子ども食堂に対してこれらの形を見做って変化することを求めているわけでは決してありません。子ども食堂を運営している方々に対しては、むしろ今あるそれぞれの姿・形をぜひとも継続していただきたいと願っています。多種多様な形の子ども食堂がそこかしこにあるからこそ、子ども食堂が地域における「特別な場所」ではなくなり、誰もがふらっと立ち寄れて、参加している全員にとって自分のあるがままを否定されない大切な居場所となることができるのだと思います。そして誰でも来られる場であるからこそ、いろんな人たちに混ざっている「黄信号」の子や家庭に気付くことができます。子ども食堂は、誰もが「青信号」の顔をして行ける場所であり、運営者やスタッフの方々が参加者全員に対して深い愛情や思いを持って接してくれることで、専門職とは異なるやり方で「黄信号」の人に寄り添い支えることができるのです。

しかしながら、それは子どもたちのすべての困りごとを子ども食堂が一手に引き受けなければならないということではありません。子ども食堂にも限界はあり、それを憂う必要はきっとないでしょう。誰しも限界があり、限界があるからこそ、子ども食堂・地域の専門職それぞれの役割や連携が生まれるのです。また、子ども食堂は専門職がちょっと気になる子を「発見する」ための場ではありませんし、専門職も子ども食堂が重大なケースを「依頼する」ために存在するわけではありません。重要なことは、それぞれが自身の限界を認識し、各々が必要に応じて連携しながら足りない部分を補い合うことなのだと思います。子ども食堂や行政・学校・福祉専門職などあらゆる人々を含めた地域のアクターたちが、それぞれの持ち味をちょっとずつ混ぜ合わせていくことで、誰も取りこぼさない地域となっていくのではないのでしょうか。

本冊子が、読んでくださった方々全員の共感を生むものとなっていることを願います。

今回のプロジェクトにご協力いただいた多くの皆さまへ、改めて厚く御礼申し上げます。また資金面で多大なご支援をいただいた、日本財団様、NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド様、誠にありがとうございました。

すべての子ども食堂・専門職の方々への敬意を表し、本冊子の結びの言葉とさせていただきます。最後までお読みいただきありがとうございました。

認定 NPO 法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ

プロジェクトメンバー 松原 祥

2022年4月

ヒアリングにご協力いただいた子ども食堂の皆さまへ

本冊子制作のためにヒアリングを実施させていただいた子ども食堂運営者の皆さま、ありがとうございました。

本冊子を作成するにあたり、9つの子ども食堂の運営者・関係者の方々からお話をお伺いしました。出来ればそれぞれ現地へと足を運んで、運営者の方々の声を直接お聞きしたかったのですが、感染症流行の影響でそれが叶わず、すべてオンラインでヒアリングを実施することとなりました。

ヒアリングはリモートではありましたが、運営者の方々の想いの強さゆえに、皆さまの熱量を余すことなく感じることができました。そして皆さまのお話を通して、子ども食堂が地域資源の新たな形として、子どもや親、地域住民の生活を支えているという現実を改めて目の当たりにすることができました。貴重なお時間を頂戴して、素敵なエピソードを共有いただいたこと、誠にありがとうございました。

一方で、運営者の方々からお聞きしたエピソードを本冊子に掲載するにあたり、ページ数の都合や個人の特定防止のために改変している部分が多々あります。そのうえで皆さまから掲載のお許しをいただき、無事に冊子の発行にまでたどり着くことができました。ヒアリングにご協力いただいた皆さまに、改めて感謝を申し上げます。

行政・学校・福祉専門職のみなさんにご読んでほしい!

ある日の子ども食堂 子ども食堂エピソードブック2

2022年4月25日

発行 認定 NPO 法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ
理事長 湯浅誠
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-20-3 西新宿高木ビル7階
Tel: 03-4213-4295
Email: kodomo@musubie.org
公式ウェブサイト: <https://musubie.org>

デザイン 和田直也 / 神山明日佳
イラスト 塩澤亜沙美

プロジェクトメンバー 山角直史 / 六鹿篤美 / 松原祥 / 山縣郁子 / 大内悠太郎 / 渋谷雅人

協賛(助成) 日本財団 / NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド
この冊子は、「2021年度ドコモ市民活動団体助成事業」により作成しました。

Supported by  THE NIPPON FOUNDATION

 MCF
Mobile Communication Fund
ドコモ市民活動団体助成事業



NPO法人 全国こども食堂支援センター

むすびえ

関連コンテンツ

こども食堂エピソードブック
こども食堂エピソードムービー

ある日のこども食堂

<https://musubie.org/pickupproject/grayzone/>



アンケートのお願い

最後までお読みいただき、ありがとうございます。この冊子をお読みになった皆さまに、是非ともアンケートのご回答をお願い致します。お読みいただいた方お一人につき1回ずつご回答いただけますと幸いです。いただいた回答は、今後の事業の発展のために活用させていただきます。



アンケートは上記 QRコード読み取りまたは下記 URL からお願い致します。

<https://forms.gle/ozgcU4aUWrU6iAcS8>